

尊厳死とはなにか―仏教の立場から―

鶴見大学仏教文化研究所所員 矢鳥 道彦

人生五十年といった時代は、もはや遠い過去のことに思われます。試みに「初老」という言葉を辞書で引いてみると、いまだ広辞苑には「四十才」と書いてあります。しかし、いまは四十才が初老であるとは、だれも思わないでしょう。平均寿命が八十年を超えるような時代です。「古稀」（古来稀なり）と言われた七十才の人も、珍しいどころか、ごく普通に見られます。私が少し前に、めでたく還暦を迎えましても、誰ひとり「おめでとう」と言ってくれませんでした。なるほど高齢社会なのだなあと、実感した次第です。

きょうのシンポジウムは、グリーフケア研究会との共催とのこと。いままさに終末期に置かれている母親を持つ身としては、少し複雑な気持ちもありますが、よい勉強の機会であると思つて、この提題者の役を引き受けました。私的なことをお話しすることになり、甚だ恐縮ですが、私の母はここ数年、自宅近くにある介護施設のお世話になっております。自宅でデイ・サービスに通っていた頃は、近くに嫁いでいる妹や姉の献身的な介護に助けられていました。私はそれに甘えて、母を施設にいれることに抵抗していたのですが、しかし周りから繰り返し説得されて、とりあえずショート・ステイに、と連れて行ったのが、そのままロング・ステイになってしまいました。要介護度の認定も当初はおまけ気味でしたが、気がつけば、それがあつという間に5のレベルまで引き上げられ、認知症の症状も日に進んでいます。いまはもう身近な家族のことも判らないような状況です。最近では眠っているような状態が多く、なかなか目も開けてくれませんが、口元に食べ物を持つていきますと、自力で食べようと口を動かし、柔らかいものでしたら、なんとか呑みこむこともできます。上手に食べてくれたときには、みなが拍手して喜ぶといった状況です。母にはまだ、明確に「生きていたい」という意思が感じられますので、なんとか一日でも長く生きていて欲しい。

これが、いま現在の、私や私の家族の切なる願いです。
この母のことで、思いついて一枚の絵を載せてあります。配布させていただいている資料の最後のページです。下に書いてあるコメントは、私が添えたものです。



土谷里美 「もう少しがんばれ」

重度の認知症である母（八十六才）が、久しぶりに介護施設から寺に戻ってきた。改修の終わった本堂を見せてあげたいという、寺の檀家でもある施設長さんのはからいによるもので、じつに数年ぶりの寺への帰還であった。母は、車椅子を押してもらって堂内に入ったものの、みなな呼びかけにも反応せず、ずっと眠ったような状態であったが、それがどうしたわけか、エンマ様のお像を祀るお堂の前に来たとたん、パツと目を見開いた。そしていつとき、まじまじとエンマ像を見つめたのである。

——この話を聞いた孫娘の土谷里美さん（私の姪）が、「たぶん、おばあちゃんはねえ」と言いながら、描いてくれたのがこの絵である。たしかに、母はあのとき、エンマ大王の励ましの声を聞いたのであろう。きっとそうに違いないのだ。——「もう少しがんばれ」。

きょうは時間の都合もあって、申し訳ありませんが、お手元のレジュメに従って順にお話しをしてゆくのは無理かと思えます。必要ときに資料番号を申し上げて、見ていただく形になります。どうかお許しください。

一般的な尊厳死というものについて、仏教の立場からどうかということを考えるならば、たとえば資料の3にある

ような戒律上の規定が、まずは参考になるかも知れません。「自ら殺すこと、また他者に殺させること、そして死を讚美し、死を勧めること」、こうした行為はいずれも重罪であり、いずれの場合も教団から追放されるという規定です。もつとも、これは仏教の出家のサンガ、出家教団の中での規定です。どこまでこの規定が援用されるべきかという点は、それゆえ判断の難しいところ です。

また、仏教では、「いのち」というものをどう考えているのか。この点は、資料の6に仏教の教理上の定義を掲げてあります。カッコの中の訳文を見ていただきたいのですが、「命根の本体は」云々のところです。命根の本体は寿すなわち寿命であつて、その寿命が煖、つまり、体温と、識、つまり、意識とを保持して、人の生命を維持する、という俱舍論という本の定義です。俱舍論は、説一切有部という一つの学派の文献で、このような説一切有部の考え方には、他の学派からの異論もあつたようですが、そこに雜阿含經の文も引いてあります。寿と煖と及び識と、三法の身を捨する時、所捨の身は僵きようか仆す。木の思き覚なきがごとし。(つまり、寿命と体温と意識とが肉体を離れるとき、肉体は枯れ木のように倒れて死ぬ)とあります。つまり、こうした考え方は、仏教の初期の段階から行われていた考え方と見られ、一つの確定していた伝統説と言つてよいでしょう。

要するに、人間の寿命というのは、体温と意識とに支えられており、それらと不可分のものであるということ です。意識のことはおいて、体温については、それが亡くなって、冷たくなった時を死だというのは、自然に受け入れられるものでしょう。誰か親しい人が亡くなったというので、駆けつけるとします。そして、その人の額に手を当てたときに、冷たくなつていれば、ああ、ほんとに死んでしまったんだと、あきらめもつくわけですが、もしもまだ温かかったら、亡くなったというのは本当なのかしら、もしかしたらまだ生きているのではないかしらと、一瞬思うことがあります。あとで時間がありましたら触れたいと思いますが、「涅槃」という言葉、原語はニルヴァーナ、ニッバーナですが、これは「体内の火が消えること」を意味するようです。「体内の火」とは何か、最近非常に興味深い学説が出されています。

仏教徒としては、こうした戒律上の規定や、またいのちの捉え方といったものを参考に、自分の立場を見い出すべきでしょうが、これを具体的な、差し迫った事柄に、ではどう適応すべきか。たとえば、また母親のことに戻りますが、早晩、母はおそらく自力での嚙下能力も失われ、認知能力も完全に絶たれるときが来るでしょう。このことは目に見えています。果たしてそうなったとき、母にとつて最善のことをしたいと思うのですが、いつたい、その、最善のこととは何でしょうか。母はまだ元気なとき、いろいろ私に言っていました。ああ言っていたけれど、どうだろう。こ言っていたけれど、果たしてどうかしらと、悩むわけです。しかし、現時点ではどうしてよいかわかりません。いや、そのようなことは、なるべく考えたくないし、少しでも先延ばしをしたいというのが、正直なところです。

しかし、一方では、私も寺の住職になつて四半世紀になります。これまで多くの人々の死に立ち会つてきました。夕べ過去帳を繰つて、勘定しましたら、千人に近い方々を送っています。通夜や葬式だけではなく、檀家さんの臨終に立ち会うことも一再ならず、ありました。そうしたときの檀家さんたちの様子を振り返つてみると、肉親の死に遭遇しても、生前にやるべきことはすべてできて、しっかりと見送ることができたという人たちもいれば、逆に、生前にはなにひとつできないまま、死なせてしまったと、悲歎し、後悔する遺族の姿もたくさん見てきました。送った人々の中には、私の父もいます。心臓病で、満六十四才でした。後悔先に立たずで、父の急逝によつて私も大きな悲しみを経験しました。生前に父のために何もできなかったという思いがあり、ひどく後悔することにもなりました。ですから、その分も含めて、母は自分の手で守り抜きたいと思つてきました。いま現在、私はこの母親のことが毎日の気がかりであることはもちろんですが、檀家さんのなかに末期ガンと闘っている方もおられ、ご家族からリアルタイムで状況を伝えるメールがときどき届いたりしています。

高齢社会というものについて、じつは身近な母のことが出てくるまでは、ずっとどこかでよそ事のような気がしていたように思います。私は多くの場合、たぶん単なる観察者であつたにすぎないでしょう。それがわが母、私を生んでくれた母親のことで、いろいろな心配したり、思い悩んだりするようになってからは、いまの高齢社会の実態という

か、その深刻な状況を理解し、実感できるようにしたといえます。終末期のあり方についても、身近な問題として、真剣に考えるようになりました。要するに、人ごとではなくなってきたのです。

こうした状態の中で、きょう、私は何をお話ししたらよいのか、じつは非常に悩んでいます。資料の最初に、広辞苑の「尊厳死」の定義を掲げてありますが、あらかじめ申し上げておかなければならないのは、医療上の「尊厳死」の概念をめぐって、ここであれこれいうつもりはないということです。また、日本安楽死協会が名前を変えて、日本尊厳死協会になって久しいのですが、この協会組織のいう尊厳死について、コメントするつもりもありません。尊厳死の法制化の問題もありますが、これは現在どうなっているのか、よくわかりませんが、これは諸宗派・諸宗教の意見を集約した二〇〇六年の新聞発表を資料の9に示しておきました。いろいろな意見があるようですが、法制化に賛成する団体はないということだけ、押さえておいていただければ充分かと思えます。

副題に「仏教の立場から」としたのは、研究所の方からの「矢島には、仏教学の立場から」とのご指示に従って、とりあえず付けましたが、きょうは、むしろ一寺院住職の立場で、つまり一地方寺院の現場を預かる坊さんの立場の方を優先させていただき、お話しをさせていただきたいと思えます。こちらの専任職を辞めて、この春から寺院住職に戻ったということもございます。私自身の体験談も交えながら、少し自由な立場でお話しさせていただくということをお許しください。

ところで、私が理想と考えるヒトの死は、やはり臨終の際に痛みのない、やすらかに迎える死であります。断末魔の苦しみのなかで死を迎えるということには、耐えがたいものがありますから、そういう死に方だけは、なんとしても避けたい。誰しもそう思うものだと思います。そのような苦しみのなかで死にたくはないし、できればそのような看取りもしたくないというのが、われわれの共通の思いです。

これはたぶん、正念を保って、従容として死を受け入れるべきという仏教本来の立場とは、相いれないものかも知れません。しかし、現実はどうか。数多くの事例において、死にゆく人も、また見送る人も、非情な苦しみを経験します。

ブツダの臨終の様子を述べる大般涅槃經も、それをもとに描かれる釈迦涅槃図も、そうした苦しみや悲歎する人々や衆生の様子を、リアルに描いています。資料の4に、釈迦涅槃図と涅槃經の文を掲げてあります。寺に生まれ育った者には、こうした涅槃図も、また涅槃經の文もなじみ深いものです。

釈尊の死去という悲歎の極みにあつて、釈尊の説かれた教えを思い起し、泰然と死を受け入れることのできた人々もいれば、死去を受け入れることができなかつた人々もいました。すると、釈尊は諸行無常を説かれ、愛別離苦を説かれたではないか、悲しんではならない。アヌルツダがそう言ったとあります。しかし、修行の不完全な者たちは、ただただ泣き悲しむばかりでした。その様子を經典は、腕を伸して泣き、砕かれたる岩の如くに打ち倒れて転転反側せりと述べています。

こうした仏伝文学では、偉大な宗教上の指導者である釈尊の事跡を、いろいろな神秘的な事象やエピソードも交えて描くのが普通で、この涅槃經にもそうした描き方がたくさん見られますが、しかし、一方ではこのように、ブツダの臨終を、神ならざる一人の人間の死として、そういう意味でリアルに描こうとしています。この臨終に至る最後の旅路のなかでは、齢八十を迎える高齢の釈尊が、まさに加齢のゆえに下血に苦しんだりする姿が、これも極めてリアルに記録されています。經典の作者は、そうした老人としての釈尊の姿を隠そうとはしていません。

数年前、来日されたタイのお坊さんと、医師でもあるメッターナンドという方が本学にも来られ、研究所では緊急の集会を開いて、ペーパーを読んでいただくことがあります。柳澤学長が所長をしておられた頃です。このメッターナンド比丘は近年、パーリ三蔵の新たな批判的研究に取り組み、ロンドンのパーリ聖典協会の機関誌(第二十六巻・二〇〇〇年)に論文を発表するなど、精力的な活動を行っておられる方ですが、とくに自ら医師の立場で、「ブツダの死の原因」についてテキストの分析を試みた論者が注目を集めています。そのときのペーパーもブツダの伝記のなかの、臨終に至る部分を扱ったもので、非常に興味深い学説を開陳されました。

周知の通り、ブツダの死因をめぐっては学界で長い論争の歴史があります。しかもいまだに決着はついていません。

とくに問題となってきたのは、ブツダの最後の旅を描いたパーリ涅槃経（『マハーパリニツバーナ・スッタタタ』）のなかで、鍛治工チユンダが最後に供養した食事の成分内容を表示する（スーカラ・マツダヴァ）という語の意味内容をめぐっての問題で、テラヴァアード仏教（すなわち南方仏教）の伝統では、一般にこの語を「柔らかな豚肉」と解するのに対して、一方の北伝仏教では、漢訳經典において「梅檀耳」（梅檀樹に生えたキノコ）と訳されるなど、広い意味で何らかの植物と捉えられてきました。この解釈上の不一致が、仏教におけるいわゆる肉食・非肉食の思想論争とも相俟って、激しい論議を巻き起こしてきました。故・中村元博士（元研究所顧問）は、豚肉とするのは通俗的な語源解釈に過ぎないとされ、パーリ注釈文献のなかにもタケノコ、キノコ、葉草などとする解釈も見られることを根拠に、最終的には「キノコ」説を支持されました。中村先生の師匠の宇井伯寿博士は「有毒のキノコ」と主張していましたが、中村博士によれば、嗅覚の鋭い豚に探させる「トリユッフ」の類いではないかとされています。

メッターナンド比丘は、こうした（スーカラ・マツダヴァ）をめぐる旧来の論争とは一線を画して、医師として、臨床的な立場から、經典が記述しているブツダの病状を冷静に分析します。經典によれば、ブツダはチユンダの差し出した食物をとって、たちまち下痢を伴う急激な病いに罹ったとされますが、メッターナンド医師によれば、じつはそれ以前、数ヶ月前から、明らかに「加齢」によると見られる諸症状がいくつもブツダには表われているといえます。その代表的な症例は、ヴェーサーリー近郊で最後の雨安居（雨季の定住）に入った時点で説かれており、「恐ろしい病いが生じ、死ぬほどの激痛が起こった」とされています。このときブツダは、「わたしはもう老い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達して、わが齢は八十となった」と述懐し、自身を「革紐の助けによってやっとな動いている古ぼけた車」に喩えたというのも、仏教徒にとつてはなじみ深い逸話です。議論の詳細は省きますが、メッターナンド比丘は、仏伝を彩る神話や超自然的なエピソードと、それ以外のものを選び分けて、純粹に臨床的な立場から經典を読もうとしています。そうした作業によって抽出される「診断」（diagnosis）の結果、ブツダの晩年は「加齢」による諸症状が進行し、ついに八十年の人生の旅の終極を迎えたと結論するのです。問題の（スー

カラ・マツダヴァンについても、その語義はともかく、下血を伴うような病状が「食中毒」から引き起こされることではないと述べ、ここでも「加齢」による腸間膜の梗塞、剥離などに要因が求められると結論づけています。

伝説を重んじるタイの保守的な仏教界からは、こうした所見に対して強い反発もあるといいますが、欧米の諸学者、なかでも仏教文献学の泰斗であるオスカー・フォン・ヒニューバーからの支持を得たとして、メッターナンド師は自説への自信をいよいよ深めている様子でした。鍛冶工チユンダや随侍者アーナンドに、一切の責任を押し付けるような単純な食中毒Ⅱ死因説は、少なくとも公平な經典の読み方ではないであろうと私も思います。經典の成立時期や神話的な要素の扱いなど、さまざまな検討すべき問題がなお残されているにせよ、「医師の眼」で仏典を読み解き、学界に一石を投じたメッターナンド比丘の所見には、充分傾聴すべきものがあり、同じ医師の立場から、その集会で当時学長であられた柳澤慧二先生から賛意が表明されたゆえんでもあります。

さて、話をもとに戻したいと思います。

お釈迦さまが八十才という高年齢を保たれたのは、当時としては異例の長生きだったでしょう。インド人の平均寿命は、いまでも六十才前後です。しかし、いまの私たち日本の社会は、高度化した医療技術のおかげで、かつてない高齢社会となっています。でも、長生きはいいことなのか。たしかに、クオリティーにもクオンティティーにも恵まれている人は、いいでしょう。いや、そうも言えないかも知れません。私がよく耳にするのは、「われわれは、生きていちゃ悪いのか」といった、お年寄りの声です。八十才、九十才になっても、お元気に活躍されている方がたくさんおられますが、そうした方々にも、じつは目に見えない精神的な迷いや負担をかけてしまっているように思われます。自らの生き死にのことは、自ら決めたいと思う人は多いでしょうが、なかなかそうも行かないのが現実です。突然交通事故に遭って、死ぬ人も多いです、自然災害で亡くなる人もおられます。昨日まで元気だった人が、何かの原因で急に亡くなってしまふことも、けっして珍しくありません。

少し自殺や自死のことについて、お話しします。相変らず年間三万人を超える方々が、自ら命を絶っているとい

ます。これは表にあらわれた数字で、じっさいは、もっともっと多いのではないかと私は思います。だれでも身近な方や知り合いが、一人、あるいは二人と、そのようにして亡くなっているのではないか。私の寺でも、自ら命を絶たれる方は少なくありません。ちよつとふりかえるだけでも、たとえば、農家の方で、手近にあった農薬を飲んで亡くなった人がいましたし、ビルの上階から飛び降りて亡くなった女性もいました。あるいは、車に練炭火鉢を持ち込んで、一酸化炭素中毒で亡くなった青年もおりました。

そうそう、このときの練炭火鉢は、遺族が処分に困ったようで、私のところへ持ちこまれてしまいました。車の方は下取りに出したはずなのに、どうして練炭火鉢だけ寺に持ち込むのかと内心では思いましたが、こうした財産価値もなく、処分に困ったものを寺に持ちこむというのは、よくあることです。しかし、さすがに、一度しか使っていない、真新しい練炭火鉢です。捨てるわけにもいかず、サンマを焼くわけにもいかず、バザーに出すのも気が引けて、何年もまだそのままになっています。

自殺した青年のことですが、どうして亡くなったのかといえば、要するに体のいいリストラにあつて、追い込まれてしまったケースです。いま辞めてくれれば、退職金はその分多くなるとか何とか会社から言われ、ちよつと結婚して、奥さんが身ごもつて、一戸建ての家が欲しいところでした。じゃあ、辞めて退職金を元手に家を建てよう、会社を辞めて、家を建てましたが、次の仕事が見つからず、ローンの返済に困つて、とうとう妻子を置いて逝つてしまったのです。

ちよつと思ひ出すのも厳しい話ですが、寺の池に身投げをした高齢の女性もいました。これも一つのいまの社会を象徴するような出来事でした。簡単にお話ししておきます。もう十年程経ちますが、ある日、私が外出先から寺に戻ると、境内にバトカーが停まつていて、何やら不穏な状況です。何ごとか。そこにいた警官に聞くと、お檀家さんの誰それがゆくえ不明で、探していますというのです。寺に来た形跡があるとのこと、いま境内や周辺を探しているとのことでした。行方不明のおばあちゃんは、介護施設から抜け出して、そのあと美容室に行つてから、お寺に来たらしいのです。これからお寺に行くんだということを、美容室で言つていたそうです。急いで私も墓地に行つてみる

と、たしかに少し前にお墓参りをした形跡がありました。間違いなさそうです。閑伽桶がわりに使ったとみえるヤカ
ンも、墓地のなかに伏せてありました。そのあとの足取りが不明なので、施設の人も加わって、みなで境内や付近を
捜しているところだったのです。そこで、私も自転車に乗って、きつとおばあちゃんは付近で動けなくなって、うず
くまっているのではないか、私がぜつたいに見つけてやるぞと、ぐるぐると周辺を探し回ったのですが、しかし、ど
こにも姿はなかったのです。どうしたのかなあと思いながら、寺に戻つてくると、さっきの警官が「任職さん、見つ
かりました！」ああ、よかったと内心思つたのですが、どうも警官の言い方が変です。「え、どこにいたの？」と、
思わず私が聞き返しますと、池の方を指さして、「あそこです」。「え、あそこって？ え、えー？」警官が指さす方向
には、お寺の溜池しかありません。「まさか」と思いましたが、そのままのことが起きていました。おばあちゃんは、
施設からはいてきたサンダルを池のふちにきれいにそろえて、身を投げていたのです。水門の近く、一番深いところに、
おばあちゃんらしき着物姿の人が、背中を向けて浮かんでいました。「任職さん、舟をお借りします。ご遺体を舟で曳
航したいので」「どうぞ、お願いします」私はおばあちゃんが運ばれてくる池の浅瀬で待機していました。

舟が浅瀬に着きますと、遺体を改めはじめた警察官が、「任職さん！」とまた私を呼びました。「これはどなたかの
位牌ですね。ああ、それから、何かお像も抱えています」。近寄つて見ると、おばあちゃんが胸に抱いていたのは、
亡くなった旦那さんのお位牌と、それから白い観音様のお像でした。まいったなあ、エライことになったと、私はそ
の瞬間思いましたが、ややあつてから、これはもう逃げようがないと、覚悟を決めました。「あとのことは、和尚さん、
お任せします」と、おばあちゃんは明らかにそう言っていると思つたからです。

いつも和服をきちんと着て、姿勢も正しく、背筋をピンと伸ばし、とてもしつかりとした、おばあちゃんでした。毎年、
春のタケノコの季節になるとかならず寺に来ました。遠方の子供さんにタケノコを送りたいというので、いつも私が
ヤブに入つて、掘つてお渡しするのが年中行事になっていました。

おばあちゃんの遺体は、境内で検視が行なわれました。春のお彼岸前の、少し温かい夕暮れ時のことでした。検視

が終わると、遺体は本堂に運び込まれました。しばらく経つと、親族の人たちも徐々に集まってきて、通夜になりました。かなりもう遅い時間でした。親族の人たちは、起こってしまったその事態に、どう対応してよいか、まったくわからない様子で、しばらくは誰も言葉を交わさず、本堂の中はずっと静まりかえっていました。私は何か言わなければならぬと思って、「こういうのを、尊厳死というんでしょね」と、とっさに言ってしまったのを覚えています。おばあちゃんがお世話になっていた施設の人たちも来ていて、私の言葉に、みなウンウンという風に頷いていました。それから家族も少しずつ話をするようになり、おばあちゃんが亡くなった事情も次第にわかってきました。

どうしておばあちゃんは、自ら死をえらんだのか。じつはもう、施設にいられる時間があとわずかになっていたのです。期間は一度だけ延長できたようですが、もう延長がきかず、まもなく施設を出なければならぬ状況だったようです。そこで家族は話し合って、子どもたちの間でかわるがわる世話をすればいいじゃないかということになっていたそうです。以前に一度、そうした形で面倒をみたことがあり、また今度もそうしよう。ところが、この方針を話し合ったとき、家はもういらぬだろうと、ついでにおばあちゃんがずつと暮らしてきたお家まで片付けてしまったのです。私の経験上、長年住んでいた家を片付けるのは、高齢者にとってはときに致命的な結果を招きます。このおばあちゃんも、帰るところがなくなってしまうわけで、ああ、施設を出たら、また以前のように子どもたちに面倒をもらうのか、そう思うとおばあちゃんは、とても辛くなったのだと思います。もともと非常に気丈な性格の方であつたし、子どもたちの間で、言葉は悪いが、またタライ回しになるのかと思えば、もういつそのこと、お爺ちゃんのもとへ行ってしまいたい、そう思って、もはやこれまでと、自らのちの限界点を悟ったということでしょう。美容室に行つて、髪を整えてから、お墓参りもして、さあ、あなたのところへまいりますと、池に飛び込んだわけです。「和尚さん、あとはよろしくね」というように。これが尊厳死でなくて、なんでしょうか。おばあちゃんは、享年九十一才でした。

さきほど、お釈迦様の臨終のことをお話ししましたが、仏教と同じ時代にインドで発生したジャイナ教という宗教があります。仏教は中世の時代に滅びましたが、このジャイナ教は、現代においても根強く生き残っている宗教です。

尊厳死という言葉から、私がいつも真つ先に思い浮かべるのは、ジャイナ教のサツレーカナーと呼ばれる、一種の宗教的な自殺です。自殺ではないとジャイナ教徒は主張しますし、私も一般的な自殺とは違うとは思っています。日本語の意味は同じでしょうが、自殺というより、自死という方が言葉のイメージとしてはよいかもれません。要するに死を覚悟しておこなう断食、「死に至る断食行」のことです。

資料の最初に出したのが、チャンドラ・ヤシャーというジャイナ教の若い尼僧さんに関する記録です。

ときは一九六八年、いまから四十年以上も前ですが、断食行を敢行して亡くなった方で、インド留学中に古本屋で見つけた薄い冊子に載っていました。それによると、このチャンドラ・ヤシャー尼（一九三八〜一九六八）は、インドのグジャラート州の出身で、十三才のとき、ジャイナ教白衣派の高僧ラブディ・スーリというお坊さんの説法を聴いて、深い感銘を受けて出家をします。数年間、サルヴォーダヤ尼のもとで修学に励んでから、十六才で正式にディークシャーを受けて尼僧となりました。以後、裸足で各地を遍歴しながら、禁欲と断食行の日々を過ごし、マドラスに着いたのは一九六八年六月二十九日だったとあります。その半月後の七月十四日から最後の断食に入り、四十五日目に息を引き取りました。医師の診断の結果は、心不全による「自然死」であつたとされています。息を引き取つたとき、チャンドラ・ヤシャーの顔は穏やかで、その両眼は崇高な光を放つていたといえます。写真左が断食四十一日目の姿で、中央は死去したときの姿です。右の写真は、このチャンドラ・ヤシャーの感化を受けて出家した女性たちです。

一般にサツレーカナーは、そこに記したように、不治の病にかかつたとき、また高齢になつたときに、また飢饉が起つたときにも実行できることになっていきます。ただし、師匠が許可した場合のみ認められるもので、勝手にできるものではありません。断食行を繰り返し行なつて、よほど修行を積まなければ、やすらかに死ぬことはできません。その見極めを師匠が適切に行なつて、充分に修行ができたというものに限つて認められるのです。

このチャンドラ・ヤシャーの場合は、年齢的に非常に若いこともあり、その意味で規定を逸脱した異例のケースでしたから、当時、かなりジャイナ教徒の間にも衝撃が走つたようです。ただし、「最後の断食」とありますが、これ

は結果的にそうなってしまったようで、本人はじつは、次の長期間の断食の予定についても周囲に語っていたそうです。しかし、ほかの事例から押してみると、四十五日間の断食というのは、生死を分けるギリギリの長さのようですから、たぶん死を覚悟してのものだったと思われるます。

高齢の尼僧さんですと、そう珍しいことではないようです。近年の報告をそこに出しておきました。坂本知忠さんというプロの瞑想家の書かれた本で、この本の出版には少し私も関わりましたが、ここに以下のような記録が載っています。

一九八九年、インド・ラジャスタン州のラドヌーンで、八十四才のケーサルジー尼に会う。断食十四日目、体重は二十一キログラムしかないが、体は健康で、ボケもない。師匠にサツレーカナーの許可を得るために、親族とともにやって来た。ケーサルジー尼は早くに夫を亡くし、三十一才で出家したという。高齢を理由にサツレーカナーの許可を懇願する尼に、師匠が問う。「この人生でやり残していることはないか」「未練はないか」「魂を十分に浄化できたか」「もう少し心をよく調べたほうがいいのではないか」ケーサルジーが答える。「ぜんぶやりました。もう、何もありません」「サツレーカナーに入らせてください。許可をお願いします」「大丈夫です。私の心は強くなっています」このようなやりとりののち、師匠が瞑想に入ると、室内は息詰まるような緊張と聖なる雰囲気包まれた。ややあつて瞑想を解いた師匠は、ケーサルジー尼にいま一度決心の程を尋ね、確認をしたのち、力強い言葉でひとこと、「許可する」と言った。すると室内はたちまち歓喜にあふれ、尼僧たちはサツレーカナーを称える讃歌を歌ったという。

（坂本知忠『ジャイナ教の瞑想法―プレークシャー・ディヤーナ』ノンブル社一九九九年）

ジャイナ教は、宗教上の救済理論が明確で、ある意味で非常にわかりやすいのが一つの特徴です。業・カルマンという言葉はよく知られていますが、われわれの行なういろいろな行為、身体的・言語的・精神的な行為、いわゆる身

口意の三業と仏教でいいますが、ジャイナ教でも同じです。ただし、ジャイナ教では、このカルマンを一種の物質とみなし、どういう業物質がどういう風に靈魂を汚すかということ、非常に細かく理論化し、体系化しています。物質は重いので、靈魂は業物質を取り込めば取り込むほど、輪廻の苦しみの世界に深く沈みこみます。悪いことをすれば地獄に落ちるし、よいことをすれば人間界や天界に上って行けるかも知れませんが、世俗的な生活をしている限りは、しよせん輪廻の世界をさまようだけです。本来は靈魂は清らかで純粹なものです。それが業によって輪廻世界のなかで浮沈を繰り返している。そのような苦しみの輪廻世界から解放されるには、ジャイナ教の教えを理解し、出家して、さまざまな禁欲と苦行の実践をしなければならぬというわけです。在家の信者は、禁欲生活をおくることで、新たな業を取りこまないように努める。一方、出家者は断食などの苦行を実践することで、すでに取り込んでしまった業物質も取り去ることができ、靈魂を清らかな状態に戻すことができるという考え方です。

仏教においては、すべての問題は「心」の問題に集約されますが、ジャイナ教では「業」です。業と輪廻する靈魂、ジーヴァとよばれますが、両者の関係が問題なのです。さまざまなカルマンのなかで、生きものを傷つけること、殺すことが、最も罪深い行為であるとされ、アヒンサー、すなわち不殺生が説かれます。なぜ、不殺生なのかということもたどると、インド人が古くから大切にしてきた倫理上の大原則があります。それが資料の2、自己類比（アートマウパムヤ）という原則です。伝統的なインドの宗教は、みなこれを説いています。衆苦・愛憎をわが身のごとく感じて、自分、アートマンを、たとえ、ウパマーとして行動することを、アートマウパムヤといっています。インドの黄金律といわれています。よく知られたキリスト教の黄金律、ゴールデン・ルールと違うのは、倫理的に配慮すべき対象がきわめて広いという点です。仏教もこれを発展させて、慈悲の思想を生んでいきますが、ジャイナ教では業の理論を整備することにも、感覚器官の数によって生物を細かく分類して、生命世界をいわば微視的に観察して、感覚器官の数が多くと考えられた生きものを殺さない、殺させないという原則を打ち立てたのです。これはまったく情緒的な世界とは無縁で、生きものを殺さない、傷つけないということが宗教生活上の重要な決まりなのです。人類の歴史上、倫理には限界がない

こと、倫理の無限界性をはじめて説き、かつ実践したのは、ジャイナ教であると、これはシュヴァイツァーの言葉です。ジャイナ教は、インドの精神文化の華であるともいわれますが、いま申し上げたような性格から、インドの外に伝播することはありませんでした。インドの民族宗教に止まったのも、むべなるかなと思われれます。一方の仏教は、アジアの諸地域に伝わり、特定の民族の宗教ではない、いわゆる世界宗教になりました。その地域、その民族の、風土や文化的な習慣、もの考え方などともうまく融合して行ったというのは、結果論かも知れませんが、仏教はインド的な業・輪廻の考え方を残しながらも、それに固執せず、非常に寛容に諸文化を受け入れて、世界宗教となつて行きました。やはり、縁起・空・無我の思想によるものでしょう。

それから、私自身のことをどなたかが訊かれるかもしれませんが、いわゆる尊厳死について、お前自身はどうなのかと。私はついぶん以前から、ドナー・カードを所持しています。カードの裏には妻の署名をもらっています。署名を頼んだとき、妻は少しだけ考えていましたが、すっかり署名をしてくれました。いつかはわからないけれども、その時が来たら、使えるものは使つて欲しいと思つています。この点は、臓器提供は「究極の布施行」として認められるという、梶山雄一先生のお考えに私は賛成します。

生体からにせよ、脳死後にせよ、自分の臓器を他人に提供するということは、仏教的に言えば、布施である。布施は、自己と他者と施物とを意識し、執着する立場でおこなわれては意味がない。布施は布施波羅蜜にならねばならない。波羅蜜とは生死一如のさととりである。無我と空のさととりから他者の幸福と利益のために自分の臓器を提供できるならば、それは真に自己を生かすことである。

（梶山雄一「意識と身体」『仏教』別冊四、一九九〇年十一月所収）

資料のうち、5の「涅槃（ニルヴァーナ）とは」についてですが、つい最近、大阪大学の榎本文雄先生が発表された

論文がありまして、涅槃の原語、ニルヴァーナの意味から説き起こして、非常に興味深い議論をしておられます。浜松の国際仏教徒協会の研究雑誌『仏教研究』に発表されたものですが、ブツダの涅槃といえ、一般にはブツダの臨終のことですが、涅槃には古来、有余依涅槃と無余依涅槃の二種があるとされ、ブツダの臨終はこのうちの無余依涅槃のことです。無余依涅槃は、別の言葉でいえば、般涅槃ともいわれます。意味は「完全な安らぎの境地」ということです。

では、有余依涅槃とは何か。これは生前の涅槃のことです。生前の涅槃とはおかしな表現だと思われるかもしれませんが、ブツダが三十五才のときに開かれたとされる、菩提樹の下での悟りのことです。この有余依涅槃と無余依涅槃、つまりお悟りという生前の涅槃と、そのような生前の涅槃を獲得した人の命終時の涅槃、般涅槃という、二つの涅槃の違いはどこにあるのか。この二つの涅槃の違いは、いいかえれば、命の終わるとき、命終の時を境目に、何がなくなつて命が終わるのか、という問題につながります。

これに関連して、榎本文雄先生が指摘されていることを簡単に紹介いたしますと、涅槃の原語であるニルヴァーナ、ニッバーナは、「(火が)消える」を意味する動詞ヴァーの名詞形であり、ニルヴァーナとは「(火が)消えること」を意味します。従来、よく言われてきたニルヴァーナの語源は、同じヴァーという動詞ですが、この「吹き消す」という意味の動詞の方の派生形とされる考え方は、いまではほとんど否定されており、火が消えるという意味のヴァーが語源だとされています。では、涅槃、ニルヴァーナにおいて消える「火」とは何か、ということが問題になってきます。

まず、悟りを得たというときの生前の涅槃では、何が消えて悟りが開かれるのか。生前の涅槃について、ブツダ自身火であると叙述される初期仏典の記述はなく、また当然ながら、悟りに関してブツダが消えたなどという記述も初期仏典にはないとして、榎本教授は、「したがって、ブツダの一部の火が消えたと考えられる。では、その火とは何であろうか？」という問いを発しています。しかし、初期仏典にはブツダの悟りを記述するなかで火の消滅ということへの言及はなく、涅槃の語と同義語のようにして、「渴望(タンハー)の消滅」や、欲望を離れた状態(ヴィラーガ)が述べられています。また涅槃を定義して「情欲(ラーガ)、憎しみ(ドーサ)、迷妄(モーハ)の消滅」であ

るとする記述などがみられます。こうした文献的事実から、生前の涅槃とは情欲などの煩惱の火が消えることで、いわば人の火的な成分である煩惱が消えることが生前の涅槃であるとしています。

では、ブツダを始めとする解脱者、生前に悟りを開いた者が、命を終える、命終のとき、すなわち完全な涅槃、般涅槃に至るときに消える火とは何か。榎本教授は、「ブツダは般涅槃に際して消えたのであろうか？」と問います。確かに、初期仏典の『涅槃経』にはブツダが火葬された時、遺骨（舍利）以外は何も残らなかったと記されていますが、「遺骨は残ったので、完全に消えた訳ではない」といい、「さらに、火葬の時にブツダが般涅槃を迎えた訳ではなく、ブツダの般涅槃の時には身体はまだ存在している。身体がそのまま残っている以上、ブツダは般涅槃に際して消えたとはいえない。したがって、般涅槃の場合も、ブツダ自身が火として消えたのではなく、ブツダの中の火が消えたと考えられる。では、その火とは何であろうか？ブツダは既に悟りに際して煩惱の火が消えて涅槃しているとして、命終に際して消える別の火とは何なのか？」このように榎本教授は問い続けていきます。そして、解脱者の命終において消える「体内の火」とは、つまりは「よく御された (sudanta) 自己 (アートマン)」にほかならないのです。榎本教授は結論として次のように言われています。

靈魂 (aman, jiva) は常住な火であり、死んで体温が消え去っても、輪廻転生して靈魂の火は消滅することがないというような考え方が初期仏教時代に流布していたと推定される。これに対して初期仏教では、ブツダのような解脱者は命終後、輪廻転生することなく、自己 (attan, aman) の火は薪が燃え尽きれば消えると思えられ、これが般涅槃という術語で表現されていると考えられる。

〔榎本文雄「初期仏教における涅槃―無我説と関連して―」、『仏教研究』四〇、二〇一二年三月、一四九―一六〇頁〕

それから、ここに相応しいかどうかはわかりませんが、資料の10に「交わりの死・見守りの器」として、一つの詩・ポエムを掲げておきました。ご存じの方も多いでしょうが、アメリカン・インディアンの世界をうたったナンシー・

ウッドの詩です。どうぞあとで声に出してお読みください。こんな風な心持ちで死んで行けたらいいなあ、と思わせてくれるような詩です。

交わりの死・見守りの器

○ナンシー・ウッド

今日は死ぬのもってこいの日だ。

Today is a very good day to die.

生きているものすべてが、わたしと呼吸を合わせている。
すべての声が、わたしの中で合唱している。

Every living thing is in harmony with me.
Every voice sings a chorus within me.

すべての美が、わたしの目の中で休もうとしてやってくる。
あらゆる悪い考えは、わたしから立ち去っていった。

All beauty has come to rest in my eyes.
All bad thoughts have departed from me.

今日は死ぬのもってこいの日だ。

Today is a very good day to die.

わたしの土地は、わたしを静かに取り巻いている。

My land is peaceful around me.

わたしの畑は、もう耕されることはない。

My fields have been turned for the last time.

わたしの家は、笑い声に満ちている。

My house is filled with laughter.

子どもたちは、うちに帰ってきた。

My children have come home.

そう、今日は死ぬのもってこいの日だ。

Yes, today is a very good day to die.

(ナンシー・ウッド「金関寿夫訳」『今日は死ぬのもってこいの日』メルクマール社一九九五年)

「交わりの死」という言葉は、ホスピス運動の指導者の柏木哲夫さんが（「看取りの医療」はどうあるべきか」というエッセーなどで）使っておられる言葉ですが、これは「死にゆく人々が、ひとりで死んでいくのではなく、家族が

そばに付き添い、家族に恵まれない人々は、医師や看護師など看取りに従事する人々がそばに存在しながら迎えることができる死」のことだそうです。「人々は孤独な死を恐れている。人々は例外なく交わりの死を望んでいる」として、その重要性を説いておられます。

「見守りの器」という言葉の方は、「終末医療における「スピリチュアルケア」の可能性」と題する高野山大学の井上ウィマラ先生の講演録にある言葉で、「深く温かな寄り添いによるスピリチュアルケア」を言い換えられた言葉です。亡くなって行く人のそばに寄り添い、温かく見守ってくれる。そこにいてくれるだけで、安心や信頼が得られる、そうした見守りの環境こそ、たしかに必要なものであり、いま求められているように思います。そこに至るさまざまなケアも大事ですが、最終的には安心や信頼のなかで安らかな死が得られるのであろうと思います。そのため用意される見守りの環境、よく整った見守りの器を、どう作っていくかが重要なのだと思います。

家族に見守られて死を迎えられるのが、たしかに最も幸せなのでしょうが、それはけっして血を分けた子どもたちや孫たちだけではありません。ブツダ積尊は、涅槃図にあるように、弟子や信者、いや、人天世界の生きとし生けるものに囲まれ、見守られて亡くなられたとされています。家族というのを、なにも文字通りの家族に限定することはないと、思いますし、どのような器の中身であっても、信頼と安心が保障されていたなら、それが最高の見守りの器でしょう。資料の11は、死を迎える日のための心得と作法17カ条というもので、看護師の藤腹明子さんが提唱しておられるものです。藤腹さんは、仏教系の大学で専門的に仏教を学ばれた方のように、仏教的な死生観がよく咀嚼され、取り入れられていると感じ入っています。

死を迎える日のための心得と作法17カ条（藤腹明子）

第1カ条…人として生まれることは難しく、今あるいのちが有難いということ

第2カ条…人はいつか必ず死を迎えるものであると自覚すること

- 第3 力条… 日々、生死一如と心得て生きること
- 第4 力条… 死ぬとき、死に方、死に場所を平生より思いえがくこと
- 第5 力条… 限りあるいのちの短さを知ること、死に支度には必要なこと
- 第6 力条… 死ぬということは、この世からあの世へと旅立つこと
- 第7 力条… 自分の「願い」を第一にして看取られること
- 第8 力条… 死に向かう過程で生じる五つの苦しみ的心得しておくこと
- 第9 力条… 看取ってくれる人々の役割・立場を心得ておくこと
- 第10 力条… 看取られることは、本人のみならず家族も含めて見護られること
- 第11 力条… 看取られる者・看取る者共々に目指すのは「救い」ということ
- 第12 力条… 自分の生き様・死に様を決めるのは、自らの生死観であるということ
- 第13 力条… 看取りの善し悪しは、看取りを受ける本人が決めること
- 第14 力条… 死を迎える日に、心残りや憂いがないように努めること
- 第15 力条… 死にゆくとしても、言いたい放題、わがまま放題は避けること
- 第16 力条… 自分の臨終・死後処置については、自身の願いを伝えること
- 第17 力条… 死に向けて心得ておくべきことには、看取られた後の事柄も含まれること

時間ありませんので、紹介だけになってしまいますが、お許しください。なんだかとりとめのないお話になってしまいましたが、以上で終わらせていただきます。